

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0861 ◆◆◆

25/10/08

【 急激な円安進行、ドル/円はさらなる上値トライなるか 】

多くの方にとって予想外だった高市早苗・自民党新総裁の誕生を受け、為替市場において急激なドル高・円安が進んでいる。いわゆる「高市トレード」と言われる動きだ。

ドル/円は先日、8月1日以来の150円台をつけ、本稿執筆時はさらに値を上げた152円台での推移をたどっている。チャートを見ると、しばらく続いてきたレンジ取引を完全に脱却したようにも見受けられ、少なくともリスクはドル高・円安方向か。もちろん一本調子ということはないにしても、155円あるいは160円といったレベルを目指す展開も否定できない。

◎「円安の流れ阻止」へ、懸念される3つの要因

当レターでは、たびたび「年間変動率」の観点からレポートをしているが、それによると最近の相場は非常に興味深い。具体的には、ここ最近の相場は単なる円安ではなく、「円は全面安」の様相を呈しているためだ。

実際、ユーロ/円やポンド/円はここ数日、連日のように年初来高値を更新しており、それに合わせてユーロ/円などの年間変動幅や同率も急上昇をたどっている。ドル/円だけでなく、クロス円においても円全面安推移との証左と言えよう。

改めて指摘するまでもなく、ドル/円のリスクは上方向(ドル高・円安)で、年初来高値158.88円を起点とした下げ幅のフィボナッチでは61.8%戻しの151.63円をすでに超えており、次のターゲットは76.4%戻しの154.40円レベル。さらなるドル続伸にも注意を払いたい。

ただし、今週初めの「高市トレード」で、ドル/円は下方向に1.5円を超える、なかなか大きなギャップ(窓)がまだ空いたまま。改めて指摘するまでもなく、「ギャップはいつか必ず埋める」とされているだけに油断は禁物か。そうした意味からすると、一本調子のドル高進行は予想できないのかもしれない。たとえ一時的にせよ、ドルの下押しにも一応要注意だ。

なおそうした状況下、先日ロイターは「ドイツ銀行とゴールドマン、高市氏勝利で円ロング推奨を中止」——といった記事を配信していたことが確認されている。有力な2つの欧米金融機関が、ともに円高リスクを放棄したとみられることは非常に興味深いとも言えよう。

また、昨7日には加藤財務相から「為替相場はファンダメンタルズを反映し安定推移が重要」とした口先介入が聞かれたものの、トーンとしては初期の初期。切迫感に乏しく、まだかなりの余裕を感じさせるコメントだった。緩やかなドル高・円安進行であれば、当局がある程度は容認するといった見方も決して少なくないようだ。市場筋が、当局の円安阻止スタンスが弱いと判断すれば、一気呵成のドル高進行も否定できないだろう。

いずれにしても、では逆に、足もとの「円全面安」が仮に止まる、そして流れが反転するならば、どんな要因が考えられるのか。個人的には3つあると考えている。

ひとつは、当レターで何度も取り上げているように「高市トレード」とも言われるような、高市早苗氏の自民党総裁就任。それを踏まえた高市新総理誕生ならびに、積極財政派の旗印を掲げる政策への大いなる期待があるだけに、それが裏切られたあるいは失望を誘うようだと、流れが一気に反転しても不思議はない。たとえば、重要政策のひとつに掲げる「ガソリンの暫定税率廃止」——などが失敗に終わるといったことになれば、前段と逆になし崩し的なドル安進行も。

また、それとともに気を付けるべきは、やはり日米の金融政策ということになるだろう。

当局者同士でも意見の不一致が見られる米国もさることながら、日本については、ブルームバーグが高市氏の経済ブレーンのひとりとされる本田悦朗元内閣官房参与の話として、「10月の日銀利上げは困難だが、12月会合の可能性はある」との見解を示していたと報じていたが、果たして結果は如何に。

そして最後3つ目は、米国による「円高圧力の有無」になる。過去の当レターでも再三再四取り上げているように、トランプ米大統領はドル高・円安の動きを長いあいだ懸念し続けており、それが「プラザ合意 2.0」

